

新島襄 と吉原重俊（大原令之助）の交流

吉 原 重 和

はじめに

新島襄は米国留学中に多くの手紙を書いており、その中に私の曾祖父の吉原重俊（大原令之助）を含む薩摩藩第二次留学生¹⁾との交流に関する記述を見る事が出来る。薩摩藩の攘夷派の志士だった吉原重俊はS.R.ブラウンから英語を、武田斐三郎から英学を学び、大原令之助という変名で1866年に長崎から密航出国し、薩摩藩第二次留学生として米国マサチューセッツ州のモンソンアカデミーに学んだ。

吉原はモンソン到着早々にアンドーバーの新島襄の元を単身で訪れて居た。同じ薩摩藩留学生の湯地定基も加えて新島襄とモンソンの薩摩藩留学生たちとの交流は続いた。ここでは新島襄の手紙から伺える彼等の交流の様子を述べるとともに、新島からの感化の結果、湯地に続き大原令之助も1869年1月にニューヨークで受洗し、クリスチャンとして信仰告白を行った事実を述べる。イエール大でラーネッドとも学んだ事のある吉原はその後初代の日本銀行総裁となった。薩摩藩留学生達はその多くがクリスチャンと成り帰国したが、その後なぜ沈黙したかについても私見を述べる。

I. 薩摩藩留学生

薩摩藩は1865年に英国へ遣欧使節と留学生併せて19人を送り、1866年には8名の留学生を米国へと送った。そもそも、薩摩藩には安政四年に藩主島津斉彬による英米仏への留学生派遣構想があった。そして薩英戦争の後に五代才助は「五代才助上申書」で上海貿易と海外視察団、留学

生の派遣を提案したが、その作成にはグラバーも関与したとされている。慶応元年9月には黒田清隆が「海軍修業奨励に関する建言書」で海外留学で人材育成を図る事を建言した。その結果、1865年に薩摩藩英国留学生19名が幕府の目を盗んではるか西洋の英国に向け密航留学を行った。全員が変名を使い、出張先は甌島となっていた。

彼ら19名の名前と帰国後の業績は、

新納刑部	薩摩藩最後の家老、大島支庁長、司法省判事
松木安右衛門	初代外務卿、一貫して明治外交を支える、元老院議長
五代才助	経済界で活躍、大阪商法会議所初代会頭
堀壮十郎	通訳、五代とともに経済界に貢献（長崎出身）

この4名は監督役であり、

町田民部	町田久成、帝国博物館建設に尽力、初代館長
畠山義成	杉浦弘蔵、東京開成学校（のちの東京大学）初代校長
名越平馬	三笠政之助 その後は不明
村橋久成	橋直輔、北海道開拓使として、札幌麦酒醸造所創設
田中静州	朝倉省吾、生野銀山局長、日本の鉱物開発に貢献
鯨島誠蔵	野田伸平、外交で活躍、駐仏公使など3カ国の公使兼任し、パリで客死

市来勘十郎 松村淳蔵、海軍で活躍、海軍兵学校校長

森 有礼 沢井鉄馬、初代文部大臣、外交と教育の両面で活躍

高見弥一 大石団蔵、数学教師、県立中学校造士館で教える（土佐出身）

東郷愛之進 岩屋虎之助、戊辰戦争で戦死

吉田清成 永井五百助、駐米全権大使などをへて、枢密院顧問官

磯長彦輔 長沢 鼎、米国に永住、カリフォルニアの“ブドウ王”

町田申四郎 塩田権之丞、小松帯刀の養子となる（町田久成の弟）

町田清蔵 清水兼次郎、のち財部家を継ぎ、財部実行（町田久成の弟）

中村宗見 吉野清左衛門、駐オランダ公使など歴任

上の15名は留学生だった。

彼らの、帰国後に果たした役割は上記のように大きかった。鹿児島中央駅前に「若き薩摩の群像」として彼らの姿を見る事が出来る。薩摩藩留学生と言う場合は英国に留学した上記19名を指す事が多い。そして翌年の1866年に米国に密航留学した8名を薩摩藩第二次留学生と呼んでいる。

II. 吉原重俊の略歴

吉原重俊は弘化2年4月10日（1845年5月15日）鹿児島に生まれ藩校造士館に学んだ攘夷派の薩摩藩士である。文久2年（1862年）4月10日に起きた寺田屋騒動に最年少の16歳で参加したが、鹿児島へ送還され謹慎処分となった。文久3年（1863年）6月27日に起きた薩英戦争には謹慎処分を解かれ大山弥助（巖）や西郷従道等とともに西瓜売りに化けて英艦に切り込もうとしたが藩主の命令で直前に中止と成った。薩英戦争の後に、重俊は藩から選ばれて遊学生として大山弥助（巖）と共に江戸へと向かった。彼は横浜でオランダ改革派教会宣教師のS.R.ブラウンに英語を学び、江戸では、函館の諸術調所の教授であった武田斐三郎が江戸開成所に転勤して来たので彼に英学を学んだ。更にその後、藩命で米国へ留学することに成った。

慶応2年（1866年）5月には5名の薩摩藩第二次留学生のメンバーとして長崎からポルトガル船に乗り英国経由でアメリカに向かった。この時、彼は国禁を犯しての密航だったので「大原令之助」という変名を名乗った。（以後大原と呼ぶ）米国に向う途中の出来事は彼らのリーダー格であった仁礼景範が書いた「仁礼景範航米日記」²⁾に詳しく書かれている。彼らは当時長崎にいたオランダ改革派教会宣教師フルベッキの書いた紹介状を持って長崎を出港した。当時、長崎に居た米国人の貿易商であるW. M. ロビネットが案内役として同行した。彼らは帆船に乗って南回りの航路で希望峰を回り英国に至り、更にニューヨークへと向かった。ロビネットについてはこれまであまり資料はなかったが、長崎でRobinet & Co.という名前の会社を作り1866年3月からグラバー商会の仕

事を始めたようで、その後はニューヨークのマンハッタンに本社があったChina and Japan Trading Co.という貿易会社の代理人的存在であった。ペルー人の母を持つロビネットはゴールドラッシュに沸くサンフランシスコで金鉱探しをして居り、米国籍をこの頃取得した。長崎に来る前は台湾で樟腦の貿易にも関わって居り、とかくの噂のある人間だったようである。このChina and Japan Trading Co.という会社はボストン近郊のバーベック生まれのウィリアム・ヘイズ・フォッグ(1817-1884)が社長を、甥のJ.F.Twomblyが副社長を務めていた。ペリー来航の結果として日本が開国したのでそれまでの本拠地である上海から長崎、横浜に進出して支店を持ち、茶、絹織物、陶器などの商売を行っていた米国の貿易会社であった。この会社はその後大阪、函館、ロンドンにも支店を開設して1915年まで日本で取引を行っていた。W.H.フォッグは1817年にMaine州Berwickに生まれ、日本や中国との貿易で成功したニューヨークの貿易商であり薩摩藩留学生達の面倒を見た。彼の遺産を元にハーバード大学にW.H.Fogg Museum of Artが造られている。大原達はフォッグの世話でブラウン牧師の母校であるマサチューセッツ州のモンソン・アカデミーに入学し、ハモンド学長の世話でイエール大学受験の為の勉強を始めた。

大原のその後の略歴は、

- | | |
|-----------------|---|
| 1869(明治2)年9月 | 初の日本人としてイエール大学に入学。 |
| 1872(明治5)年3月2日 | 岩倉使節団に新島襄、杉浦弘藏と共に現地参加。 |
| 1873(明治6)年3月12日 | 英国より帰朝後は外務省に入り外務一等書記官として在米国公使館勤務を経て大蔵省に転じた。 |
| 1874(明治7)年8月2日 | 重俊は租税助と横浜税関長を兼務していたが、大久保利通の清国出張に随行して清国と交渉を行い条約草案の起草に携わった。 |

- 1878（明治11）年11月27日 パリに出張し松方正義、上野景範、青木周蔵とともに不平等条約改定交渉に努めた。
- 1880（明治13）年2月28日 横浜正金銀行管理長、大蔵少輔に任ぜられる。
- 1882（明治15）年10月6日 日本銀行が創立され松方正義に推せられ初代総裁に任ぜられた。
- 1885（明治18）年3月 外債募集のため10ヶ月間欧米を回った。
- 1887（明治20）年12月19日 病のため42歳で現職のまま没する。

Ⅲ.新島襄との交流

1867年ボストン近郊のアンドーバーに留学していた新島襄は密航留学の身なので、幕府関係者との接触は避けていたようだが、同じ密航留学生であるモンソンの薩摩藩第二次留学生達とは手紙のやりとりや、お互いに行き来をして居り、その目的もキリスト教への理解を深めようという意思の元で行われていた。岩波文庫「新島襄の手紙」同志社編³⁾の53ページを見ると、1867年3月29日に新島が父の新島民治に宛てた長い書状を出していて、「昨年十一月、薩洲侯のご家来六人程ニューヨークへ到着致し、その内一人（吉原重俊）当所へ参り、小子を尋ねくれ候。小子日本を去りしより同国人に逢い候は、これが初でござ候いしゆえ、殊の外、欣喜仕り候。かつ当時この六人の者はモンソンと申す所の学校（Monson Academy）へ罷り越し、英学の修行いたし居り候。－後略」と書いている。

この手紙を読むと大原令之助（吉原重俊）は留学早々に単身で新島を訪ねたようである。彼が実際にアンドーバーを訪れたのは到着早々の11月ではなく、学校生活にも慣れた翌年の3月に成ってからであるとも考えられが、大原も新島の住所だけを頼りに単身でモンソンからボストン行きの汽車に乗り込み、初めて会う新島を訪問したのだろう。それにしても大原は何故一人で、新島に会いに行ったのだろうか。更には、大原

はどうして新島がアンドーバーに居る事が判ったのだろうか。

同じ書状には「さてご返書の義は星野閨四郎様へ御頼み、横浜に罷りあり候彦蔵(アメリカ彦蔵)へ御あい成され、別紙を御見せ成され候わば、その者必ずその書状の世話いたしくれ候わんと存じ候。中略 もし彦蔵横浜表に罷りあり候わねば、杉田様へ御頼み、同所に罷りあり候教師、アメリカ人ブラウン (S.R.Brown) と申す者へご返書御差し向けさるべく候。」と書いてあり、横浜に居たブラウン牧師や彦蔵は当時既に新島がボストンに居る事を把握していたと思われ、大原がブラウン達から出発前に新島の情報を得た可能性は大きいと思われる。更には新島を援助したボストンの貿易商のハーディーと薩摩藩留学生の面倒を見てくれたW.H.Foggを始めとするニューヨークの貿易商達は互いに面識が有る筈で彼ら貿易商仲間、あるいはフェリス牧師をはじめとするニューヨークの宣教本部、更には先行してボストンに着いた、同じ薩摩藩留学生の芦原洲平(木藤市助)から情報を得た可能性が考えられる。いずれにしてもモンソンに到着した大原の訪問を受けて異国の地で初めて会う日本人に感激している新島の姿が目につかぶ。

「モンソンと申す所の学校」というのはボストンから西へ90Km程のマサチューセッツ州モンソンに有った全寮制のイエール大学入学の為の予備校として有名だったモンソンアカデミーの事である。ここはブラウン牧師の母校でもあり、以下の6名の薩摩藩第二次留学生達が留学する事に成った。

仁礼景範	(1831 ~ 1900)	変名	島田カンイチ
吉原重俊	(1845-1887)	変名	大原令之助 幼名は弥次郎
湯地定基	(1843 ~ 1928)	変名	工藤十郎。
江夏嘉蔵	(1831 ~ 1870)	変名	久松壮助
種子島敬輔	(1844 ~ ?)	変名	吉田彦麿、伴七郎
木藤市助	(? ~ 1867)	変名	芦原洲平

実は、大原は最初に寄港した上海でキリスト教に関する本を手にいれ、その後船中でその本を読みキリスト教に興味を覚えていたことが最近判

明した。大原が米国へ到着早々に単身で新島のもとを訪れた目的は彼にキリスト教について話を聞こうとしたのだとすると納得がいく。大原と一緒にモンソンに居た湯地定基もキリスト教に興味を持っていて、その後大原と共に新島の住まいを訪れて互いに信仰について語り合った。明治維新になり藩からの留学資金は途絶え、大方の留学生達は帰国する事になったが大原はアルバイトをしながら勉強を続け、1869年5月には小松帯刀の尽力もあり官費留学生として認可された。

1869年7月1日に大原令之助と吉田彦磨はモンソンアカデミーを卒業した。卒業に際し2人はそれぞれ「Japan as It was and Is」及び「Introduction of Christianity into Japan」という英語のエッセイを書いて、ニューヨークタイムスの7月4日版に記事が転載されている。この時大原は二十二歳、吉田は二十四歳だった。吉田はギリシャ、ラテン文学などに興味を持ち、更に一年古典科に留まり語学を習得、その後英国に移り、ロンドン大学ユニバーシティーカレッジ法文学部で法律を研究、明治6年ごろ帰朝したがその後の消息は不明である。吉田清成関係文書には帰国後、吉田清成を東京で訪ねるが、吉田は既にアメリカ経由でイギリスへ出発してしまっていた、という内容の書簡が残されている。

モンソンの薩摩藩第二次留学生達と新島襄との交流をまとめると、

- (1) 1867年3月29日付け新島民治宛書状によると大原はひとりで新島襄をボストン近郊のアンドーバーに訪ねた。7月31日付け、Mary E. Hidden宛手紙の中で、「I wrote to Rev.Russel, Capt.'s brother in law, Japanese OoHara [Reinoske?], and Mr. Frint. 」と書いていて大原令之助に手紙を書いた事を教えている。
- (2) 8月26日付けの書簡で新島はモンソンの6名のうち最年少のものが一番優秀と書いた。大原の事を指すと思われる。
- (3) 11月22日付けMary E. Hidden宛手紙の中で、[I like to see those Japanese, who are at Monson but it will be some expense to go there.]

とモンソンを訪れたかったが旅費が無かったと手紙に書く。

- (4) 12月1日付けOrilla Frint宛ての手紙で, [but the same morning two young men called on me unexpectedly. Do you think who they are? Two Japanese from Monson.

They hindered my sawing wood but I was perfectly satisfied to spend a few days with my countrymen.

When I saw them I did not know whether should I speak English or Japanese, but they begun to talk Japanese with me, so I was obliged to speak my own tongue. At first I found some confusion to talk to them, but I did speak better and faster that they did. They stayed in my room whole morning, and the afternoon I showed them all cabinets and Gymnasium. I called on them at Hotel in the evening and I stayed there after ten o'clock. We read together 28th chapter of St. Matthew.

I think they understood the chapter quite well, but they found trouble to understand the Trinity; so I explained to them far as I know. They asked me to make prayers, but I could not make them in Japanese, so I made them in English.

Though they cannot speak English freely, yet they understand English very well.

These two are best scholars among those Japanese in Monson. I hope they will become good instruments to their countrymen.

I spoke with them about the religious matters during these hours.

They found their sin; they found also the way where they meet their children.

They thought first they would study some sciences to benefit their country, but God opened their blind eyes and took away thick veil between them and heaven.

He made them know the grace through which they may have immortality. So they feel grateful for hope also to do some good things

to their people for the sake of Christ.

I am thankful that God bless my countrymen so much, and I hope the time will soon come for Gospel to bear in the barren and unmaturred land.]

と書いている。

先の月曜日に大原と湯地がアモースト大学に進んだ新島を予告なしに訪問し、午前中一杯彼の部屋で話し込んだ様子が書かれている、夕方からは新島が彼らをホテルに訪ねて10時過ぎまで、共にマタイ伝の28章を読んだが、三位一体はなかなか理解出来ず苦戦したようだった。新島に祈り方を教えてもらったりしてキリスト教の理解に努めようとしていたほほえましい様子が判る新島の手紙である。

- (5) 1868年11月14日 付けMary E. Hidden宛手紙の中で,[While I was writing this the same evening, I heard suddenly the knocking of the door. When I opened it, it was a Japanese from Monson.I was so glad to see a man, who shook my hand so joyously, saying “Nee-Sima Gokigen Yoroshika” (How do you do? Nee-Sima!) .中略

His name is Kudo Zuro. He has not advanced in his study so far as other Japanese in Monson have. He has gone back yesterday afternoon. Two of them were gone home over two months ago. So there are only three Japanese remaining.] 後略.

この手紙には湯地定基（工藤十郎）がごきげんようといって急に新島を訪ねた様子が書かれている。

- (6) 1869年 1 月16日 付けMary E. Hidden宛手紙の中で,[Dear friend, I returned here a week ago Thursday, visiting my Japanese friends in Monson on the way from Hinsdale.]と書いてあり、Hinsdale のプリント夫妻を訪れた帰りにモンソンに立ち寄った。湯地や大原の受洗の直後という事もあり、彼等を祝福しにモンソンを訪れたと思われる。

- (7) 3月17日付けJohn Gardiner Smart宛て手紙の中で、[Cudoo (one of Japanese in Monson) remarked me , when I saw him at last time, that we cannot exist without God.

So it is right for us to obey to his commandant.] 後略

新島が湯地の事を手紙に書いている。

更に7月23日に新島はCentral Churchで行われたイエールカレッジの卒業式で大原と吉田を見かけたと書いている。しかし卒業式に宗教的要素が乏しいので彼は好まなかったようである。

大原はこの時既に薩摩藩の密航留学生から明治政府の官費留学生の身分に成っていた。新島はあくまで独立した宗教者としての己の生き方を選び、大原は責務に忠実な明治新政府の官吏としての道を志していた。その後、奇しくもこの二人は岩倉使節団に三等書記官随行として現地採用と成った。新島の岩倉使節団への参加の端緒を作ったのは森有礼とのボストンでの会談と言われているが、森はモンソンの留学生経由で新島の存在を耳にしていたのかも知れない。

IV. 大原令之助の受洗

W.E.Griffis著「A Maker of New Orient」⁴⁾の215ページに日本人改宗者としてO'Hara Reinoskeの名前が記されており、以下の様に述べられている。

「1869年1月18日にレイク・ビュー教区牧師館からDr.Brownは日本人改宗者に関する手紙をNorthern Christian Advocate紙の編集者を書いて送った。八年間彼は日本で先駆者として働いた、そして一人のキリスト教を受け容れた日本人を知る事と成った。この手紙において米国において洗礼を受けた最初の日本人である、Neesima (新島 襄) がマサチューセッツのアンドーバーのキリストの教会に認められた事を示した。1865

年から66年のほぼ同じ年代にDr.BrownとMr.Ballaghのかつての教え子の矢野元隆が1864年11月に受洗、これが彼自身の国での最初の公共の洗礼であった、最近では、1866年5月20日にMr.Verbeckの転向者達が長崎において受洗した。1869年1月18日までに日本国内に7名の聖書クリスチャンが居て、一名が米国に居た。永井（吉田清成）がニューブランズウィックのメソジスト教会においてDr.Tiffanyに、改革派教会で杉浦（畠山義成）がDr.C.D.Hartrantに、工藤（湯地定基）がマサチューセッツのモンソンで洗礼を受け、最後が大原令之助だった、全部で十二ないしは十三名のクリスチャンとして信仰告白を行った日本人が居た。希望の朝が明けて永く輝ける栄光の日が訪れた。」

日本人に対するフルベッキ、ブラウン、バラ達のプロテスタント宣教の様子を書いたグリフィスのこの本に大原が最後の改宗者と書かれていた事を私は全く知らなかった。森有礼、杉浦弘蔵、吉田清成など薩摩藩英国留学生の多くが、藩からの留学費用が滞ってしまったこともありニューヨークのカルト教団である新生兄弟社（Brotherhood of New Life）に移ってきていた。森たちはハリス教団を今でいうカルト教団とは思わず、キリスト教だと思っていたようだ。モンソンに居た留学生たちもこのハリス教団に参加する事となったが、大原、湯地、種子島、芦原の四名はモンソンに留まった。宣教師であるブラウン牧師、そして新島襄に接していた大原達は本来のキリスト教とカルトを見分ける眼を持っていたので盲目的にハリス教団には参加せず、むしろ積極的にプロテスタント信者としての道を歩みはじめていた。

昨年、当時のニューヨークにおけるキリスト教系新聞紙上に大原令之助の受洗にいたるまでの記事が存在している事が判明した。NewYork Observer紙⁵⁾ 1869年1月21日付けによると、
「大原令之助は日本政府によりこの国において外交官としての教育を受けるべく派遣された若者で、キリストに対する公の信仰告白を行い、十日の日曜日に日本から帰国中のこの教会のブラウン牧師のもとでこの州のオワスコ湖のオランダ改革派教会に加わる事と成った。教会会議の前

の彼の試験は十分満足が行くものであった。かれの最初の宗教的インプレッションはこの国に来る前にしばらく立ち寄った上海で長老派教会の宣教本部の印刷所に何の気なしに立ち寄り、そこで気に入った本を持って行って良いと言われて選んだのが「The Heavenly Way」の漢語訳の「天路指南」8) だった、それを読んだ事によって彼はキリスト教に対する最初の宗教的衝撃を受ける事に成った。この国に到着した後に彼は次第に神への道を求め、それをより完全に学ぼうとした。そして、最後には彼がキリストに忠誠を誓う公の信仰告白を行う事に成った。」

大原は長崎を密出国して最初の寄航地である上海で立ち寄った Presbyterian Board of Missionary Press の事務所に何の気なしに入り、そこで「The heavenly Way」(天路指南)の漢文の本を貰って読んだのがキリスト教を知る最初の出来事だったと書いてある。仁礼の日記には、四月七日に世話をしてくれた米国商人のロビネットの同僚であるアシトンと一緒に、書華堂の亭主を訪問したが不在だったので、止む無く宿へ戻ったと確かに記載されている。この「書華堂」は旧上海城小東門外にあった American Presbyterian Missionary Press 「美華書館」であることはほぼ間違いないと思われる。ここは中国国内向けのキリスト教宣教用書籍、印刷物の印刷所で当時の館長は記録によれば6代目のウィリアム・ガンブルであった。彼が開発した明朝体の漢字と英字の金属活字で印刷が行われていた。ガンブルはその後、日本の印刷技術の向上に多大な影響を与えている。

仁礼たちは館長のガンブルに会うために美華書館を訪れたのだった。ガンブルの所在を確認している間に、大原は何の気なしに事務所に入り、そこにあった本棚を見回しているときに館員にどれか好きな本を持って行って良いと言われて、大原はブラウンのところで英語を習う時から目にしていた「The Heavenly Way」の漢文訳である「天路指南」を迷わず選んだようだ。この美華書館にはヘボンが同じ年の十月に岸田吟香を伴って「和英語林集成、1867年美国平文先生編譯」の印刷の為に訪れている。平文先生とはヘボンのことである。この辞書の英字表記は、「A Japanese and English Dictionary with an English and Japanese Index」で

ある。今まで何となく読み過ごしていた仁礼の日記における上海での大原たちの行動とNewYork Observer紙の記事の内容が140年の時を経てびたりと一致したのだった。

信仰告白文

更にニューヨークオブザーバー紙の1869年3月18日付け紙面には「Japanese converts」というタイトルで大原令之助の署名入り記事が掲載されている事が判った。これはまさしく大原令之助の信仰告白文であり、彼は米国に着いてから聖書を買って求め読んでみたが最初は内容が良く判らなかつたと書いている。しかしその後、一人の東洋の若者が西洋文明の根幹をなすものは何かと、探求を続けていく様子が書かれているので以下に原文と抄訳を記す。

NewYork Observer Religious department March 18, 1869

A JAPANESE'S CONVERSION.

The Rev. S. R. Brown has furnished for publication the following from the pen of the young gentleman who is passing the winter with him, and pursuing his studies.

It is dated, 9th January, 1869

"I was born in a heathen land, and brought up in the midst of idolatry and superstitions of various kinds, and I had not any knowledge of God and His salvation.

In an early day I entered into a school, where I was taught the doctrine of Confucius, and the consequence was, that I firmly believed in the annihilating of the soul with the body. I thought, also, that all things which exist in the world, were the works or nature, and there was not any Being who created and governed them. I also believed in the original purity of the heart, as Confucius and followers taught. I have written out here these

three articles, because they are very important, and are directly opposite to the doctrine of Christianity.

“Several years having so passed, at last there came a time when I was delivered out of darkness into light. That was the departure from my country to this. When I was coming to this country, I got a book which was written in Chinese, about the subject of Christianity, by a missionary in Shanghai, and this was the first book written on the subject, that I had ever read, and the first time I was informed of anything about it.

My impression was that it would have a more powerful effect on the mind of men in conducting their moral life, than the doctrine of Confucius would, because Christianity teaches us to regard this world as only a temporary abode, but the next to be eternal, and also the fear of future and everlasting punishment can restrain the most violent passion, while the hope of coming happiness, inspire the courage to strive after good. Yet I had not any idea myself of believing these doctrines. But after that I had a desire to read the Bible, just to know what is written in it.

After my arrival here I bought a Bible and read it. But I was not much interested in it, nor could I understand it well, at that time, though I used to go church. I also could not understand the preaching, not even a single sentence.

“Some time after that I found in my reading book many excellent passages often quoted from the Scriptures, and while reading modern history, I was also convinced that Christianity has an important place in the course of modern civilization.

The next moment, I was led to think that all science, art and useful implements of modern civilization, are merely leaves and branches, whilst the principal root which produces them, is the Christian religion. I cannot tell now, why I thought so, nor do I think that was exactly correct. Yet it brought a wholesome effect on the mind, for I commenced then,

continually to direct my attention to the subject of religion.

I could understand the Bible pretty well, about this time, and had to recite in it every Saturday afternoon for two terms in school.

“I could easily believe then in God who created the heavens earth, and all things therein, and admire very highly the moral teachings of the Bible. Yet I was not so ready to believe in the glorious scheme of salvation and the wonderful miracles of Christ.

At last I was led to think that it is a foolish or an absurd idea for me, with such a feeble understanding, belong merely a man to say I cannot believe these things because I cannot understand them or because they are not as I thought them to be.

I became conscious also, that it would be a great blessing to me if I would believe the religion, because then I can overcome more easily all the difficulties of the present world, and keep myself more easily from the follie, thereof, in the hope of eternal glory. and in the pleasure of serving the load and Creator of heaven and earth, than I could in following the teachings of Confucius, whom I regard only as a good man, and whose view was limited simply to this world.

I saw, too, that the Bible is the book by which we can settle the difficult questions of the first beginnings and future destinies of all things in the world, and without it we should wander to and fro, in dark imaginings and vain superstitions.

“After I had these thoughts, many objections melted away from my heart, and I loved to pray and to read the Bible. I thought not until I tried to live a Christian life by myself, that I was very sinful. Perhaps I was too proud to acknowledge it, yet I became from that time, conscious that I was a miserable sinner in the sight of God, and committing sins day by day. So it put me almost in despair of entering into the kingdom, for a space of

time, till at last I could find to my own satisfaction, that faith in the Saviour is the fundamental principle of salvation, from the verse in Romans, where the Apostle faith, Being, justified by faith, we have peace with God, through our Lord Jesus Christ.

And I think now that faith brings hope, and hope endurance, which by the grace of God will enable me to continue in the faith to the end, and so I am resolved to end my whole life as it becomes a Christian, where ever I am or shall be, depending upon the mercy and guidance of God.

“ (Signed,) O'Hara Reinoske”

S.R.ブラウン牧師は公表のために彼と共に冬を過ごし、学業を修めている若い紳士のペンから1869年1月9日を持って以下の記事を提供しました。

「私は異教徒の国で生まれて偶像崇拜と様々な種類の迷信の中で育ちました、そして私には神に関するどんな知識と彼の救済もありませんでした。私は早くに学校に入学して、そこで孔子の教えを学びました、結果として魂は肉体と共に滅びる事をしっかりと信じました。また、私は、世界に存在する万物が、自然の産物であり、それらを作りだした存在もなかったと思いました。また、孔子と追隨者が教えたように、私は心の純粹さを信じました。それらが非常に重要であり、キリスト教の主義に直接に反対であるので、私はここにこれらの3つの記事を書きました。数年が過ぎ去り、私が暗黒の闇から光の中へと生まれ出る時はついに来ました。それはここへの私の国からの出発でした。この国に来る時でした、私は中国語で書かれた一冊の本を得ました、それは上海の宣教師によるキリスト教に関する本であり、これがこの件に関して書かれた最初の本であり、私が今までに読んでいて最初に私はそれに関して少なからず知識があった本でした。私の印象は人が道徳的生活を行う際に人の心に、孔子の教えより強力な影響を与えるだろうということでした、というのはキリスト教は現世を一時的な住まいと見なし、次の世界が永遠であることを教えるので、私たちが、将来的で永遠の罰への恐怖が最も乱

暴な情熱を抑えることができるので、来るべき幸福を望みます。しかし、私自身には、これらの主義を信じる事についていかなる考えもありませんでした。しかし、その後には何がそれに書かれているのかと聖書を読みたくくなりました。ここへ到着した後に私は聖書を買ってそれを読みました。私はあまりそれに興味を覚えませんでしたし、内容も良く理解出来ませんでした。そして、私は以前は教会によく行きましたが説教のただ一つの文章さえ良く理解できませんでした。

その後、私の読む本で聖書からしばしば引用された素晴らしい文章が多くあることが判り、近代史を読むとキリスト教は現代文明において重要な場所を占めている事を確信しました。次の瞬間、私は、現代文明のすべての科学、芸術、および役に立つ道具が単に葉と枝であると思うように導かれました、それらを生産する主要な根は、キリスト教です。私は今、何故私がそのように思い、それが正しいと思ったかを言う事が出来ません。しかし、その事は心への健全な効果をもたらしました、私はそして絶えず宗教に関心を持ち始めたのです。私は、今や聖書をかなり理解できて、毎週土曜日の午後に2節を学校で暗唱しなければなりませんでした。

私はその時容易に天国、地上、およびそこに万物を創造した神を信じる事が出来、聖書のモラルに関する教えを非常に高く賛美できました。しかし、私は救済の栄光の計画とキリストの素晴らしい奇跡を信じる準備ができていませんでした。ついに、私はそれが私にとって愚かなあるいはとんでもない考えであり、そのような弱い理解では、私はこれらの事を信じられない、なぜならば私は彼らを理解出来ない、又は彼らは私がそうであると考えたものではないというだけの男でしかないという考えと導かれました。私は又、もし私が宗教を信じるのであればそれは私にとって大きな福音と成るということに気づきました、というのも私は現在の世界の全ての困難をより容易に克服出来るように成り、私自身をより容易に保つ事が出来ます、永遠の栄光を望み、主と天地の創造者に仕える喜びは、私が善人だけと見なして、視点が単に現世に制限された孔子の教えに従うよりもより良いものです。

また、聖書が世界の全ての起源に関する難問題と未来の運命に決着をつけることができる本であり、それがなければ、私たちは暗い映像と無駄な迷信の中であちこちさまようしかない事が見えました。この考えを持った後、多くの反論が私の心から消え去りました。私は祈る事、聖書を読む事を愛しました、クリスチャンとして生活するまでは私が罪深いとは思って居ませんでした。多分、私はそれを認められないくらい誇りに思っていたのですが、その時以来、私は神の目から見て日毎に罪を犯すみじめな罪人であった事に気がきました。それで、王国に入るのについてもう少しで私は失望してしまうところでした、時間をおいて、私は最後に私自身の満足を見つける事が出来ました、救世主への信頼が救済の基本原理であり、ローマ人の詩から、使徒の信頼、信頼によって正当化されて、私たちには平和が私たちの主イエス キリストを通した神と共にいます。そして私は今信頼が希望と辛抱をもたらし、神の慈悲で私が最後まで信頼を持ち、私が全生涯を何処においても神の慈悲と導きにより最後までクリスチャンとして終わる事を決めました。」

署名 大原令之介

1869年といえば日本では未だ禁教令が有効で、プロテスタント教会でも日本人の受洗者は未だ極く僅かの時代である。その時代にS.R.Brownはニューヨークで彼が牧師を務めていたオワスコアウトレットのオランダ改革派教会で若い薩摩藩留学生である大原令之助に洗礼を授けていた。このオワスコアウトレットの教会は別名サンドビーチ教会とも呼ばれ、現在ではホテルに改装されているのがわかった。令之助が洗礼を受けたチャペルは現存していてホテルのバンケット会場として使われている。これまで家族そして子孫の誰一人として重俊が留学時代に米国でキリスト教の洗礼を受けていたなどは、思いもよらない事であった、私が曾祖父の若かりし頃を調べ出した当時はニューヨークでの留学生時代に彼がどのような生活をしていたの全く不明だった。しかし、彼がキリスト教信者だった事を示す資料が百四十年も経ってから見付かった事は驚きであった。そして留学生時代に新島襄と交流があった事も驚きであ

る。これまでキリスト教とは全く無関係と思われていた大原が、洗礼の日付、場所そして信仰告白の内容まで明確に成ったキリスト教徒であった事は、彼が当時は言えなかったが、何とかして自分の真の姿を公にしたかったのではないかとさえ思えて来る。当時の薩摩藩留学生達は皆純粋な若者だったのだろう、驚くことにその多くがキリスト教の洗礼を受けている。国禁を犯して密航した薩摩藩留学生達が更に現地で洗礼を受ける事は十分な思慮が必要な時代であった筈である。彼等の多くは初めはトーマス・レイク・ハリス教団に参加して、やがてそのまやかしに気づき、そこから脱退してニューブランズウィックのプロテスタント教会で洗礼を受けた者が多かった、それらをまとめると。

吉田 清成	1868年11月から翌年の1月の間	Dr.Tiffany	New Brunswick Methodist Church	Methodist
杉浦 弘蔵 (畠山義成)	1870年?	Dr.C.D.Harran	New Brunswick Dutch Reformed Church	Dutch Reformed
工藤 十郎 (湯地定基)	1868年12月から翌年の1月の間	不明	The First Church of Monson	Congregational
大原令之助 (吉原重俊)	1869年1月10日	S.R.Brown	Owasco Outlet Dutch Reformed Church	Dutch Reformed

この当時の日本国内におけるプロテスタント受洗者を見ると、

矢野 元隆	1864年11月4日	バラ	病床	日本基督公会
粟津 高明	1868年4月	バラ	横浜海岸教会	日本基督公会
小川 義綏	1869年2月	タムソン	横浜海岸教会	日本基督公会
仁村 守三	同上	エンゾー	長崎	幕府の謀者

1869年1月の大原の受洗は、日本国内と比較すると1869年2月の小川義綏より早く、それまでに僅か数名の日本人がプロテスタントの洗礼を

受ただけであった。米国でとはいえS.R.ブラウンが最初に洗礼を受けた日本人が大原だったというのは興味深い事実である。吉田清成と島山義成は薩摩藩英国留学生であり森有礼達と共にロンドンからニューヨークに移ってきたメンバーである、湯地定基、吉田彦磨、芦原洲平、大原令之助はモンソンに居た薩摩藩第二次留学生のメンバーである。森有礼、長澤鼎、谷元道之、野村一介達は今でいうカルト教団であるハリスの教団に留まったが、彼等とて当初はハリスの教えをキリスト教と信じてコロニーの一員と成ったのかも知れない。

イエール大学入学

大原が入学したのはYLSすなわちYale Law Schoolで法律、政治、経済を学んだ。1870年に発行されたカタログ¹²⁾にはジュニアクラスにOhara Reinoskeと記されていて、住所は121 High Street New Haven と成っている。この住所には現在Yale大学のLaw School の建物が建っている。ただ一人の日本人留学生として多くの白人の学生に混じって勉強するのは大変だったに違いない。後に新島襄を助け同志社大学の初代学長に成った、D.W.ラーネッドが彼の回顧録の中で、「それで、先ず私一人の事を簡単に申せば、明治三年に本国の大学において、ウールセ先生から政治学の講義を聞いておりましたが、その同級生の中に小原という日本人がおりました。これは、私が始めて日本人にあったのです。」小原という日本人と一緒に勉強したと書いている。この小原こそまぎれもなく大原令之助の事であるが、小原として回顧録に載っていたので、長い間大原である事が判らなかつた様である。

イエール大学を離れる

Y L S (Yale Law School) で法律を勉強していた1871年の11月に大原は突如として大学を去る事になった。イエール大で発行された「The Yale Literary Magazine, Vol36」⁸⁾ の106頁には「Ohara reinoske, of Kagoshima, Japan, has been sent to Europe by the Japanese government to make report of the war」として、旧知の大山弥助が普仏戦争観戦武官

団のリーダーとしてニューヨークに到着する3日前の11月25日付けで大原は官命で戦争のレポートをする為に欧州に派遣されるので大学を去ることが記されている。普仏戦争は欧州における初の近代戦であり、その様子を知る事は明治新政府にとっては重要な事だったという指摘がある。大原は留学中の身で有ったが戦時における金融財政や法律問題を实地に知るといふ政府の要請があったとすれば卒業するかしないかに拘らず官費留学生として官命に従う必要が有ったのではないだろうか。彼は武官団随行の後に米国へは戻らずフランクフルトで紙幣印刷に関する新しい仕事を行っているので、政府はイエール大卒業というタイトルよりも更に重要度の高い役割を彼に与えたのだろう。

V. クリスマン留学生達の沈黙

米国留学中にクリスマンと成った薩摩藩留学生達は日本へ帰国し必然的に明治新政府の中で仕事をする事になったが、多くの場合彼等はクリスマンである事は公言しなくなる。例えば吉田清成は帰国し大蔵省入りする事に成るが、帰国する前にキリスト教信者である事が問題になる事はないだろうか心配している趣旨の手紙を出している。1869年にフェリスはフルベッキに宛てて、薩摩スチューデント達が神学を学びたいと言いつけているのだがどうしたものだろうという質問をしている。フルベッキはフェリスに対し1869.6.28付けの書簡で、もし善きクリスマンであれば国に帰り、官職を得て、国の為に有為の人材となる事が出来る。しかし、神学を学ぶとなると、期待されている将来を台無しにし、帰国さえ叶わないかも知れないという趣旨の回答をしている。クリスマンに転向するのはうれしいが国内の状況をみると、やり過ぎないようにという冷静なアドバイスをしていたようだ。

1871.4.27 付け The New York Evangelist紙に「A Pleasant Episode」というタイトルでラトガース大の日本人留学生の杉浦弘蔵が留学の目的を宣教師を目指す事に変えたいと政府に申し出たところ、許可されず以前と同じように勉学に励めと伝えられたという内容でフィラデルフィアで

開催された The Moral Science Association の朝食会でつたない英語でスピーチした事が掲載されている。

大原令之助は家の者にも信者であることを話していなかったようであるが、米国においては宗教系新聞にはキリスト教のもとで日本の西洋化に貢献したいという趣旨の考えをBrownが投稿したにせよ信仰告白文として披瀝している。S.R.Brownは米国東部の宗教界に対して自分が導いた日本人の改宗者の情報を積極的に発信していたようである。日本では未だ禁教令が有効で、浦上四番崩れが起きた時代でもあり、国内に伝われば問題が起きたかも知れないが、読者が限定された英字宗教新聞であれば安全と判断したのだろうか。どうやらフルベッキやフェリス、モルレー達宣教師は留学生達に対して帰国しても周囲にキリスト教信者である事を積極的に明かさない方が賢明であるとアドバイスしていたようである。新島襄のように明らかに宣教師である場合を除き、明治政府の公職につく人間にはダブルスタンダードである方が得策であると判断したのであろうか。ブラウンは日本から大原を送り出すまでには、英語だけではなくキリスト教についても密かに話はしていたのであろう、大原は米国に渡り現地の生活に慣れ親しむ事により、自然と米国人とキリスト教の関わりが理解できて、更に神と自身との関わりが納得出来たのでブラウンから洗礼を受けたのだと思う。この考えに至るまでに彼は新島襄のもとを訪れて日本語で互いに議論し合い、彼に感化されていったのだろう。モンソンでの日々の生活を通じてキリスト教への理解がより深まり、西洋文化の中へわが身を投じていくためには避けて通れない道として洗礼を受ける決心をしたのであろう。

しかし当時はまだキリシタン禁制の時代でもあり、長崎ではキリシタン弾圧が行われていた時代だったので、国費留学生の身分としてはクリスチャンである事をあえて公言しないのが唯一の選択だったのだろう。大原にとってキリスト教はあくまで自分の心の持ち方としての信仰だったのではないだろうか。同じ薩摩藩の留学生であった森有礼の場合も、本人は信者であるとも云わず聖書を読んでいた事も無かったが、有礼の孫にあたる関屋綾子さんの著書⁹⁾には「ただどこにもクリスチャンで

あったとの証拠が無いにもかかわらずその生き方そのものが、どうしてもクリスチャンであるとしなければ辻つまが合わないほどに、真にクリスチャン的な人であった」とあり、キリスト者としての生活そのものであったようだ。しかし結果として彼はキリスト教徒と疑われて暗殺されてしまった。1871年（明治3年）12月23日に制定された海外留学生規則によれば「生徒上程前 神祇官へ出頭し、八神殿へ参拝し国恩報効の念を興し 神酒を拝受して外教に汚染せざる誓いを立つべし 帰朝の時またこれを還実すべし」と成っていて留学生が異教へ染まらないように政府は禁止してしまっただった。

当時の留学生で明治政府に登用された人達は沈黙の道を通ったと思われるが、ブラウン牧師は知り合いの新聞記者を介してむしろ積極的に、大原の受洗の事実を米国東部の宗教界ないしは実業界に知らしめていたと思われる。当時は英文の宗教新聞の記事が日本国内では容易に読める時代では無かったので安全と判断したのだろうか。

VI. S.R.Brown牧師について

薩英戦争後に吉原弥次郎（重俊）は大山弥助（巖）と共に藩から選ばれて江戸に遊学する事に成った。大山は江川太郎左衛門の下で砲術の勉強に励んだが、重俊は横浜の外国人居留地にあった横浜英学所で宣教師のS.R.ブラウンに英語を習う事になった。ブラウンは同じオランダ改革派教会から派遣されたフルベッキやシモンズと共に1859年に日本の地を踏み、この横浜英学所で英語を教えていたのだった。ここは幕府が横浜運上所（税関）の役人に英語を学ばせるために開設した英語塾だったが、幕府の役人以外でも習う事が出来たようである。開設は文久二年（1862年）で、場所は当時の横浜運上所（税関）の前であり、現在の神奈川県庁所在地である。ヘボンがアメリカ長老教会海外伝道協会に対し「私たちが組織したばかりの学校」という表現でこの英学所の事を報告している。1865年の6月には5クラス40名が在籍していたとされるが、1866年11月26日の横浜大火でこの建物は焼失してしまった。フルベッキも

ブラウンも日本に対する宣教の目的でニューヨークに本部を持つDutch Reformed Churchの海外宣教本部から派遣された宣教師であった。1859年3月21日付けニューヨークタイムズ紙は日本への新たなミッションに向かうブラウン達の事を記事として取り上げている。

彼等あくまで表向き英語教育のために日本を訪れたのであり、宣教師でありながら日本人に対するキリスト教の布教活動は一切認められて居なかった、しかし彼等は日本人の中にキリスト教への改宗者を多く育てるといふ彼等なりの目的を持っていたと思われ、日本人の転向者を得る事は宣教の目的からして重要な課題であった。重俊にとってはブラウン牧師との、この出会いがその後の彼の人生に大きな影響を与える事に成ったのであった。彼、Samuel Robbins Brownは1810年、米国コネティカット州のイーストウィンザーに生まれた。母は讃美歌307番、319番の作者として知られている。マサチューセッツ州モンソンに有ったイエール大学の予備校ともいえる全寮制のモンソンアカデミーに学び、1832年イエール大学を卒業した。1838年ユニオン神学校を卒業、ニューヨーク市の長老教会に属した。その後 中国に渡りモリソン記念学校校長となった、1839年マカオ、のちに香港に移り、中国において8年間キリスト教伝道に尽した。1847年妻の病気のため帰国し1851年から1859年の間ニューヨーク州オーバン近郊オワスコ・アウトレットの改革派教会牧師となった。1859年フルベッキ、シモンズと共にオランダ改革派教会から宣教の為日本に派遣され神奈川に到着。成仏寺にヘボンと同居して日本語研究、伝道、聖書翻訳などを行なった。

1963年横浜居留地に移り、横浜海岸教会の牧師として居留地の外国人のための礼拝を行った。この年『日英会話篇』COLLOQUIAL JAPANESEを上海で印刷し、翌年には横浜英学所で英学を教え始めた。1867年横浜の自宅が火災に遭い一時帰国したが、彼は2年後に再来日した。そしてこの時は新潟英学校（北越学館）の教授となり、翌年に修文館の美術教師として横浜に戻った。1873年（明治6年）には横浜山手二一一番にあった自宅に「ブラウン塾」を開設したが、この頃になってキリシタン禁制の高札がやっと撤去された。このブラウン塾の塾生の中

からは、その後プロテスタント教会や教育界の指導者となった人たちも多かった、ブラウン塾は1877年（明治10年）に東京築地に移り「東京一致神学校」となり、やがて白金の「明治学院」へとつながっていった。彼は1880年マサチューセッツ州モンソンにて帰天、ヒルサイド墓地に埋葬された。

大原たち薩摩藩米国留学生をモンソンアカデミーに送り出したS.R.ブラウンは1859年当時中国人のYung Wingを米国に帯同し、モンソンアカデミーで教育を受けさせ、イエール大にも進学させている。Yung Wingは在学中にキリスト教の洗礼を受けた。イエール大入学にあたりブラウンは彼に卒業後は宣教師として働く事を条件に学費の援助を申し出るが彼はその申し出を断り卒業後は香港に戻り事業家として成功した。彼は後に在米国の中国総領事として再度米国の土を踏む事になった。このYung Wingと10年の隔たりはあるが、ブラウンは日本において見込みのある者を選び、米国で教育を授け、再び日本で有益な仕事をしてもらおうと思っていたと思われる。その意味で大原はブラウン牧師に選ばれたと言える。過去にYung Wingに宣教者の道へと誘い拒絶された事もあり、大原がブラウンから同様に宣教者への道へと誘われたかどうかは判らない。彼は新島に対しても将来宣教師として働く事を条件に学費の援助を申し出ているが、この申し出は新島に拒否されている。

If I had a hundred lives, I would give them all for Japan. – S.R.Brown –

おわりに

私は1982年の末から85年まで企業駐在員としてニューヨークに生活した、その頃ニューヨークという土地に関する私のデジャブな感覚はいつたどこから来るのか不思議だった。日本に居る時はあまり感じなかったキリスト教というものが、アメリカに暮らすように成ってより身近に感じられたのもこの時だった。クリスマスの時期に家の外に飾られたイルミネーションの輝きは当時の私には新鮮だった。私がこの国で生活し

仕事をしていく為には、キリスト教の理解なくしては有り得ないと感じていた、遠く明治時代に私の曾祖父が肌で感じていたニューヨークの感覚が時空を超えて私にも感じられたのではないだろうか。私はアメリカでより身近にキリスト教を感じて、日本に帰ってから受洗したのだったが、同じようにかつてアメリカで生活した曾祖父は果たしてどのような宗教的インプレッションを感じたのかを知りたいと思ったのが、私が吉原重俊研究を始めた理由だった。

私が本格的に彼の事を調べ出したのはおよそ10年くらい前に京都伏見の寺田屋を訪れてからだった。当初はなかなかはかどらなかったが、最近のインターネットの検索技術の進歩のおかげで、これまで判らなかった文献にも容易にアクセス出来るように成った事で過去の資料を得る事が出来た。

私が今回この紀要をまとめることになったいきさつは、大原令之助の受洗の事実を教えて頂いた新島研究会の布施田哲也様に、同志社大学神学部の本井先生の著書である「ビーコンヒルの小径 新島襄を語る(八)」¹⁰⁾の253頁に「吉原重俊はキリスト教を受け入れることもなく帰国した」と書かれていると教えて頂いたのが発端だった。本井先生が同志社校友会のHPでイエールと吉原重俊について書かれていたのは知っていたので、そのうちご連絡をと考えていたところだったが、「ビーコンヒルの小径」を読み進むと、253頁には以下の記述があった。

「留学生と言えば、ラーネッドはイエールでは、「オハラ」(Ohara)という日本人学生と政治学のクラスで同級だった、と回顧しております(「回想録」五頁)。この人名はこれまで、「小原」と訳されてきました(同前)。実は大原令之助(本名は吉原重俊)です。そうなんです、日銀総裁に成るあの吉原です。ということは、(前に触れたように)吉原は新島だけじゃなくて、ラーネッドとも早くから知遇を得ていたことになります。奇しきことですね。

奇しきことと言えば、こういうこともあります。吉原は最初にイエー

ルを正規に出た日本人です。アジア人では、中国人の容閔に次いで二人目です。ふたりは、モンソン・アカデミーの卒業生ですから、高校も同じです。なぜか。共にS.R.ブラウン（在横浜）という宣教師の世話で留学したからです。ブラウンの故郷には、彼の母親が住んでいましたし、イエールは彼の母校です。

ちなみに、新島が牧師・宣教師として帰国したのに対し、容閔は入信したものの、宣教師になることを拒んで一信徒として帰ります。一方、吉原は、といえ、彼の場合は、キリスト教を受け入れることもなく、帰国します。

彼ら三人は宗教的には、三者三様の帰国の仕方をしています。同じ留学でも、収穫物は別々です。というより、新島独り、特殊なんではなかね。」と書かれていた。

早速、本井先生に「重俊はブラウン牧師から洗礼を受けたクリスチャンであることが極く最近判りました」とお伝えしましたところ、近著の「マイナーなればこそ」¹¹⁾ 新島襄を語る（九）の204頁には、「そこへ最近（2011年6月）に、私には衝撃的なニュースが飛び込んできました。薩摩の留学生たちは、アメリカで洗礼を受けて信徒となっていた、というのです。えつ、これは驚きです。まさか、薩摩の留学生が信徒になるとは！です。知らせてくださったのは、吉原の曾孫、吉原重和氏です。子孫にもこれまで未知の事柄だったようです。典拠は、「ニューヨーク・オブザーバー」（New York Observer Religious department、1869年3月18日）です。同紙に、吉原が大原令之助という名前（偽名）で書いた文書（同年1月9日付）が、「ある日本人の回心」というタイトルの記事の中で、全文、紹介されています。—後略—」

として書いて頂き、更に大原令之助の来歴と新島襄との交流について同志社大学新島研究会でお話をする機会も得た。新島と大原達が初めて米国で会ってから140年振りに当時の事を話すことが出来た貴重な機会だった。重俊の留学生時代の軌跡を調べていると、まるで大原令之助と時空を超えた鬼ごっこをしているような感覚にとらわれ、多くの書物や

多くの人の日記に時折、大原という文字が埋め込まれていて、あたかも彼が私を彼の生きた時代へと導いてくれている様であった。

最初はいったい何処に導いてくれているのか判らなかつたが、途中から私の心の中にキリスト教にまつわる何かが大原に関係しているのではないかという思いが湧き、気が付いたらキリスト教と大原との関係を一生懸命に探していたのだ。私は大原が留学中にキリスト教から何かを感じていた筈だという確信のもと、その痕跡を探し出したいと強く思うように成った。彼の受洗の事実を確認出来たのも、生前は様々な理由でキリスト教徒である事を公言出来なかつた曾祖父の魂が、私の心のどこかに届いた結果、キリスト教徒である吉原重俊を発見出来たのだと思っている。新島襄もあれだけ大原の事を手紙に書いたのにやっと気がついてくれたと言っているのでは無いだろうか。そして大原令之助の受洗という思いがけない事実に遭遇し、それはブラウン牧師の指導と新島襄との交流から感化されていったのだと確信する事が出来た事を神に感謝したい。

謝辞

著書の中で新島襄と吉原の交流について述べて頂くと共に、本紀要への投稿の機会を作って頂いた同志社大学神学部教授 本井康博先生。

「仁礼景範航米日記」の存在とモンソンアカデミーについて教えて頂いた鹿児島純心女子大学副学長 犬塚孝明先生。

杉浦弘蔵を主体としたKozo Webをインターネット上で公開され、大原についても多くの示唆を頂いたシカゴ在住の村井智恵様。

新島研究会会員で大原の受洗の事実を教えて頂いた公立丹南病院副院長の布施田 哲也先生。

ロビネットについて教えて頂いた長崎総合科学大学ブライアン・パークガフニ教授、ウイスコンシン大学Lane Earns 教授。
の各位に御礼申し上げます。

以上

参考文献

- ① 犬塚孝明著『明治維新対外関係史研究』吉川弘文館 昭和62年 134頁
- ② 犬塚孝明「仁礼景範航米日記」『鹿児島県立短期大学地域研究所年報』第13号 昭和60年、第14号 昭和61年
- ③ 同志社編『新島襄の手紙』岩波文庫 2005年 53頁
- ④ W.E.Griffis, *A Maker of New Orient : Samuel Robins Brown*, Fleming H.Revell Company, 1902
- ⑤ *New York Observer*, Jan.21 & March.18, 1869
- ⑥ 倪維思著『天路指南』上海 美華書館 1861年
- ⑦ *CATALOGUE of THE OFFICERS AND STUDENTS in YALE COLLEGE 1870-71*, NEW HAVEN TUTTLE, MOREHOUSE & TAYLOR, 1870.
- ⑧ Students of Yale College, *The Yale Literary Magazine*, Vol.36 1870-1871 p.105
- ⑨ 関屋綾子著『一本の檜の木』日本キリスト教団出版局 1981年 73頁
- ⑩ 本井康博著『ビーコンヒルの小径 新島襄を語る(八)』思文閣出版 2011年 253頁
- ⑪ 本井康博著『マイナーなればこそ 新島襄を語る(九)』思文閣出版 2012年 204頁